

草の芽句会だより

NO,108
29,8, 3

どの人も夫々の好み夏帽子
思いがけぬ訃報にとまどふ夏の果

節子

久々に寿子句碑訪ふ蝉しぐれ
日盛りや歩兵連隊記念の碑

純子

ふるさとの札所径なりしやがの花
父の日は父戦死せし沖縄忌

貞

朝涼の居間に木漏れ日揺れてをり
葭障子はずして法要始めけり

禮子

城山の慣れ来し径夏深む
昼顔のあるかなきかの風に揺れ

剋子

入道雲真白し空の青きかな
新緑の峠越えれば瀬戸の海

芳子

木漏れ日の影を落して黒揚羽
友を待つ木陰の涼し海の風

貞子

いちじくの葉腋に青き実一つづゝ
いちじくに羽音を立てて蝉飛びし

範子

出席者 氏家 森 真鍋 馬場 小山
投句者 吉崎 小林 川原

城山の朝は蝉しぐれに包まれていた。カナカナ、ニイニイ、ジージー、時折ツクツクホーシも。「蝉は元気やなあ」「力いっぱい鳴くなあ」「晩まで鳴き続けるんやろか」「何を食べよるんやろうかな」 地上に出ると蝉は数日の命と聞く。今日を限りの蝉もいるのだらうな・・・。心に沁みいるような蝉の声に耳を傾けていると、遠き世界からのメッセージにも聞こえる。もうすぐ終戦記念日。蝉しぐれは戦場に散った多くの人たちの想いを伝えてくれているのかも。大手門広場には夾竹桃が大きく枝を広げ、紅い花を咲かせていた。

主婦には忙しいお盆の月にも関わらずたくさんの句が寄せられ、充実した会報となった。暑さも後半戦、元気で夏を乗りきれれる予感がする。七日は立秋である。

